



カサブランカ 高光一也 一没後25年 高光一也展一

没後25年

■ 高光一也展

■ 大乘寺の文化財

■ 大名家の調度

一婚礼調度を中心に一

- 主なコレクション展示
- 12月の企画展示室
- 1月の展覧会予告
- 企画展示Topics
- 展覧会回顧
- 行事予定

大乗寺の文化財

11月23日(水・祝)～12月23日(金・祝)
会期中無休

加賀の古刹大乗寺は、守護の富樫氏により鎌倉時代末、現在の野々市市に創建と伝えられます。後に永平寺より徹通義介を招き、この寺を禅寺として開山しますが、それにより大乗寺は、永平寺以外では最初に建てられた曹洞宗寺院であることから、「曹洞宗第二の本山」とも称されることとなります。

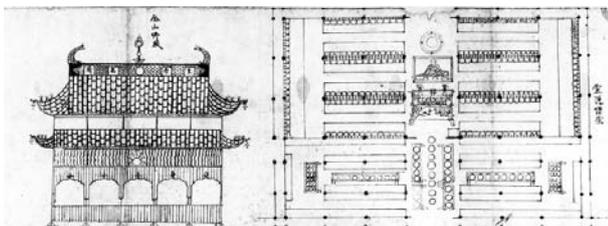
その後、永光寺・総持寺の開山でもある大乗寺二世瑩山紹瑾、三世明峯素哲の時期に基礎が築かれ、室町時代には足利幕府の祈願寺として寺領・屋敷が安堵されました。ところが一向一揆によりその保護者を失い、平定した柴田勝家の兵火によって、堂宇も焼失しました。

加賀藩主前田利長の時代に、木の新保(現在の

金沢市本町)に移転・再興され、慶長六年(一六〇二)には加賀藩の老臣で本多家の家祖政重により、本多家下屋敷に隣接する石浦大乗寺坂下(現在の本多町)に移転します。今でも県立工業高校から石引台地へ登る坂を大乗寺坂と呼んでおり、その名残をとどめています。

ついで元禄のころ、藩より与えられた現在の地に移転し、今日に続くことになるのです。

現在、大乗寺に伝世する文化財は当館に一括寄託されており、古文書・絵画・工芸など総数およそ四百点にのぼります。今回の展示ではそのうちより、重要文化財の支那禅刹図式(寺伝五山十刹図)をはじめとする文化財を公開します。



重文 支那禅刹図式(部分)

大名家の調度
—婚礼調度を中心に—11月23日(水・祝)～12月23日(金・祝)
会期中無休

調度とは、日常使う手回りの道具や器具類、また小型の家具を指します。大名家の調度となれば、そこに家格が反映されることとなります。江戸時代には武家調度の形式が完成し、殿邸の各部屋の位置付けにふさわしい調度類が配されました。そして通常、それらには同じ意匠の蒔絵がほどこされました。

また大名家の息女が嫁入りの際に持参する婚礼調度は多岐にわたり、三棚をはじめ、化粧道具、歯黒道具、手水道具、文房具、衣裳箆筒に、碁盤、将棋盤、双六盤、貝桶などの遊戯具、楽器類が加えられました。

今回は、十一代將軍徳川家斉の二十一女溶姫(偕

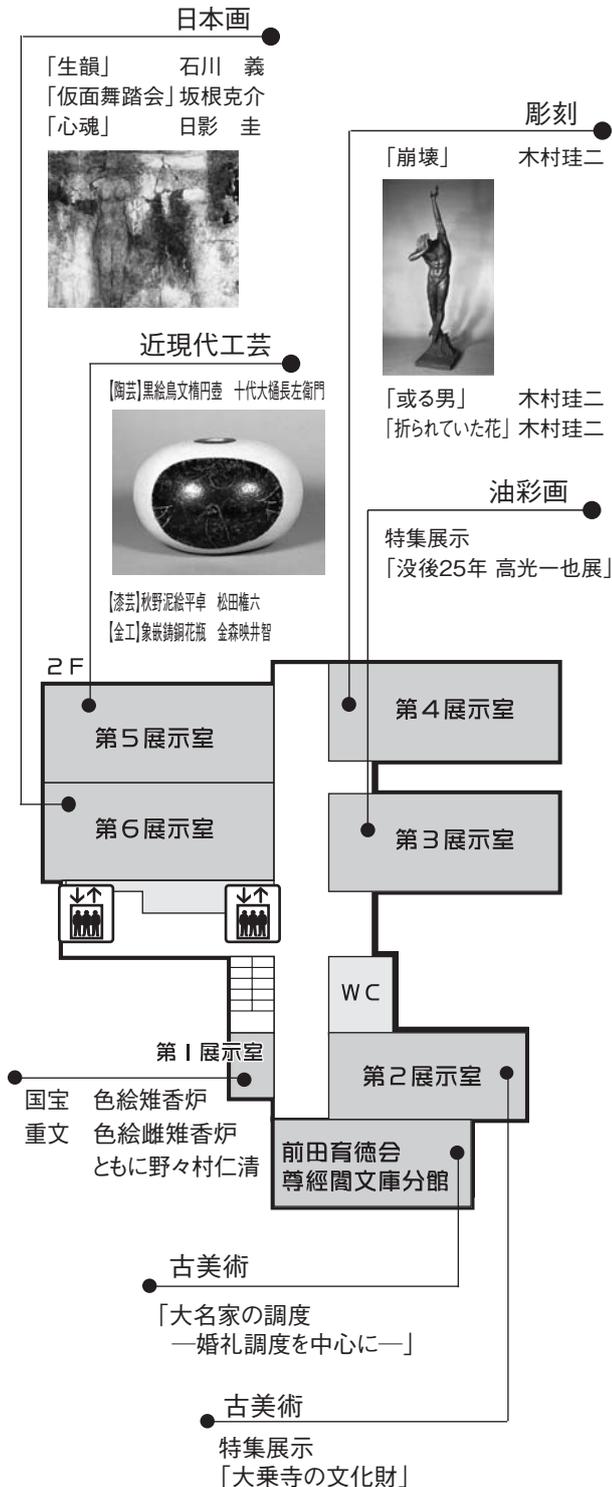
子)が前田家十三代齊泰に嫁ぐ際に調えられた蒔絵蒔絵調度を中心とした展示です。蒔絵蒔絵調度は、全体を黒漆塗として若松唐草を意匠化した地紋と、徳川家の家紋である葵紋を蒔絵でほどこした一揃いです。三棚の一つである書棚や、貝桶を欠いているものの、江戸時代末の大名家の生活を知る貴重な資料といえます。

溶姫は一八一三年に生まれ、一八二三年に齊泰と婚約し、一八二七年に江戸の加賀藩邸に興入れしました。一八六三年に金沢にはいり、一八六四年に江戸に戻り、一八六八年に金沢に戻り、同年この地で生涯を閉じ、天徳院に葬られました。

葵紋蒔絵調度品のうち十二手箱
江戸19世紀

主な展示作品

11月23日(水・祝)～12月23日(金・祝)
会期中無休



没後25年 高光一也展

11月23日(水・祝)～12月23日(金・祝)
会期中無休

高光一也氏の没後二十五年に際し、当館所蔵品を中心に回顧展を開催します。氏の六十年に及ぶ画業の歩みは、写実を根幹に、大正末から昭和未まで、各時代のモードを鋭敏に取り入れて展開したものでした。この時代に写実で人物を描く画家は、時代の波に翻弄され続けました。戦時中は従軍画家として徴用され、戦後は欧米から押し寄せた抽象美術の波に、写実との折り合いに格闘することになります。美しいものがあるがままに描くことはすでに過去のものであるとされた時代もあります。こうした中で、高光氏はほぼ十年を一区切りに作風を築き上げていったのでした。

高光氏は明治四十年一月に金沢市北間町の専称寺住職高光大船の長男として生まれました。昭和七年に帝展初入選を機に寺を継ぎ、僧侶と洋画家の二つの道を歩むことを決意します。画業のテ-

マが裸婦と女性像で、いずれもが屈託のない明るい表情を見せ、健康美に溢れたものであることは、生きる道を説く僧侶としての氏の思想が形となって現れたものといえましょう。

本特集では氏の画風を、「戦前・戦後の写実期」、「抽象美術への対応期」、「写実の復活期」、「各時代の融合調和期」、この四期に区分してご覧いただきます。幅広い高光氏の画業のあゆみを、この機会にぜひご覧下さい。

主な展示作品

「秋I」昭11、「画室にて」昭21、「裸婦」昭27、「子供と裸婦」昭30、「聖セバスチアンの殉教」昭33、「ヴァイオリンを持つ」昭40、「フードの女I」昭47、「カサブランカ」昭50、「馬に凭る(B)」昭55、「チュールリー公園にて」昭61



高光一也氏



子どもと裸婦 昭和30年

第23回 志賀町を描く美術展

12月9日(金)~13日(火)会期中無休 午後6時まで

◇入場無料
◇連絡先

志賀町生涯学習センター

TEL 〇七六七―三二―二九七〇

志賀町の美しい自然を描く絵画展です。風景だけではなく、志賀の生活・産業や夢をキャンバスに描くことを通して、ふるさと再発見と芸術文化の振興を願って開催するものです。例年、町の内外から多くの応募をいただきました。志賀と金沢で入選作を展示してきました。本年、二十三回目ではじめて石川県立美術館で「金沢展」を行うことになりました。洋画・日本画・水墨画・版画など約二二〇点が公開されます。

第96回 公募写真展研展

12月1日(木)~12月6日(火)会期中無休 午後6時まで

◇入場無料
◇連絡先

金沢市東山二丁目二一八

土田貴夫

TEL 〇七六一―二五一―〇七二三

東京写真研究会が主催する研展は、関東中部、関西、北陸の四支部で構成されています。公募展は、会員部門と公募部門に分けられていて、今回は三五四点の作品が展示されます。北陸部においての入賞者は、会員部門が四名、公募部門も四名となりました。合評会は十二月四日(日)午後二時より行います。

石川県陶芸協会は今年創立五十周年を迎えました。工芸王国石川にあつてその中心としての役割を果たしてきた当協会は、今日まで二人の文化勲章受章者をはじめ数多くの俊英を輩出してきました。

今展では、大樋長左衛門、吉田美統、武腰敏昭をはじめ現在活躍している八十余名の会員代表作と、歴代役員を務められた物故の大家の名品をおりませて展覧いたします。出品作品には日展や日本伝統工芸展で高い評価を得たものも多く含まれており、またとないこの機会に是非ともご覧下さいますようお願い申し上げます。

◇入場無料
◇連絡先

能美市寺井町よ二五 石川県九谷会館内

石川県陶芸協会事務局

TEL 〇七六一―五七―〇二二五

丹羽俊夫会長が石川県を基盤として創立し、今年三十五回展を迎えます。

理事長三宅厚史、副理事長今村文男をはじめ、北陸三県はもとより、近年は九州・広島・東京・岩手などからも出品されます。

本展では、日本画約一〇〇点を展示します。

◇主な出品者

北出朝之・保科誠・柴田輝枝・村中博文・南好乃・中村勝代・大窪昭子・牛丸美代子・北川真理子・松尾功一朗・伊藤夏子

◇入場無料
◇連絡先

金沢市窪一―二二三三

丹羽俊夫

TEL 〇七六一―四四―五九二六

第35回 公募日創展

12月17日(土)~18日(日)会期中無休 午後6時まで

創立50周年記念 石川県陶芸協会展

12月1日(木)~12月11日(日)会期中無休 午後5時で閉室

1月の展覧会予告

当館企画展・コレクション展

当館企画展

古美術優品展

— 山川コレクションを

中心とした茶の湯の美—

平成24年1月4日(水)～2月5日(日)

当館の顔ともいえる国宝「色絵雄香炉」(野々村仁清作)をはじめ古美術作品は、金沢の素封家山川家が三代にわたって収集された山川コレクションが核となっており、山川庄太郎氏の没後五十年の節目を迎えたことを記念して、藩政時代より培われた美意識が息づく金沢を代表するともいえる近代の数奇者山川家の茶道美術を中心に、当館が所蔵する古美術の優品を公開します。加賀の茶道を中心とした文化をお楽しみください。

茶道具と名物裂

【前田育徳会尊經閣文庫分館】

平成24年1月4日(水)～2月6日(月)

前田家では藩祖利家以来、代々の藩主は茶の湯に深く心を寄せて、千利休をはじめ、高山右近、小堀遠州などの茶人たちの交流のなかで、茶の湯をはじめとする様々な文化を深めていきました。茶道の発展とともに名物裂も珍重されましたが、前田家の名物裂は茶の湯に精通していた利常の収集で、それは優れていると同時に種類が多く貴重であり、名物裂の宝庫といわれています。前田家の茶道具と名物裂を紹介します。

新春を寿ぐ【第2展示室】

平成24年1月4日(水)～2月6日(月)

作品に用いられるモチーフには、「季節」を表すもの、特定の「景色」を示すもの、「吉祥」を意味するものなどさまざまあります。本特集では、新春にふさわしい吉祥と季節感あふれる作品を、寄託作品の中から紹介します。

展示予定の作品は、石川県指定文化財狩野尚信「柳鶯図屏風」、加賀市指定文化財「水仙模様縫箔小袖」(菅生石部神社蔵)、「紅白梅図屏風」など、約十五点です。

明治の工芸【第5展示室】

平成24年1月4日(水)～2月6日(月)

武家政権が終わり、新しい時代の幕開けとなった明治時代は、美術工芸の歴史においても大きな動きがありました。外国へ目を向けた明治政府は、日本の美術工芸を世界に知らしめるべく、武士からの注文が途絶えて危機的な状況にあった職人たちに、輸出用の製品作りを奨励したのです。こうして生まれた美術工芸品は、技術の高さを過剰なまでの装飾で表現しています。時代のあだ花とも称される、この時代特有の作品をご紹介します。

ハレを描く日本画

【第6展示室】

平成24年1月4日(水)～2月6日(月)

日本に根付くハレやケの概念が明らかになつたのは柳田国男の「明治大正史 世相篇」においてといわれています。日本において絵画はハレの日をどう描き、また生活の中でハレとどう関わってきたのでしょうか。当館所蔵や寄託の近代日本画を通じてご覧いただく小企画です。会場芸術とはひと味違う、床の間における日本人のハレの美意識をご堪能下さい。

洋画の先駆者 佐々木三六展

【第3展示室】

平成24年1月4日(水)～2月6日(月)

佐々木三六さんかくは明治後半から大正末にかけて石川県の洋画に多大な影響を及ぼした画家兼美術教師です。生まれは福井で、明治八年から十四年までイタリアのトリノの美術学校に留学しています。三十年に石川県尋常中学校(金沢第一中学を経て現在の金沢泉丘高校)に赴任し、四十四年まで図画教師として教鞭をとりました。その後も金沢に暮らし大御所として金城画壇の誕生にも関わっています。今回の展示ではイタリア留学時の油彩から晩年の作品までを網羅し、佐々木三六の画業を回顧します。

古美術優品展

—山川コレクションを中心とした茶の湯の美—

平成24年1月4日(水)~2月5日(日)会期中無休

前号でも紹介したように山川コレクションは、茶道具を中心とした古美術品のコレクションです。いうまでもなく当地は江戸時代より育まれた文化土壌が豊かな地域でした。明治維新による幕藩体制の崩壊により東京や京都、大阪、名古屋などの大都市では、大名家や武家、さらには旧家から、多くの美術骨董品が売却のため市中に回り出しました。当地金沢ではそうした混乱の影響が少なく、中央の美術商たちはこぞって当地の名家へと美術骨董品を持ち込んだことで、山川家などの素封家に名品が収集されました。すると、近代の数奇者たちが加賀の地に収集秘蔵された名品の鑑賞に訪れます。明治四十五年五月、『大正名器鑑』の著者で有名な高橋箒庵が、井上世外侯に随従して金沢を訪ねていますが、その際の見聞記を、『東都茶会記』に「金沢聞秘録」として、山川家については「陳列品の多くは精粹優逸いわゆる池中の物悉く凡鱗ならざる趣あり。…(中略)…香合は当家の独擅場なるが如く感ぜられ、…」と詳述し、「高名天下に隠れなきものなり、…断じて天下第一の白雁と称揚するを憚らざるなり。」を始め、「黄瀬戸宝珠香合」「宋胡録柿香合」「交趾金花鳥香合」「仁清花笠香合」などについても記され、最後に「見逃すべからざるは有名なる仁清雉子の香炉なり。…仁清の大作且つ傑作とは云ふべきなれ」と記し締めくくっています。こうした名品を一堂に展示いたしますので、新春のひと時をお楽しみください。



色絵花笠香合 野々村仁清

学校出前講座

芸術の秋到来。学校出前講座十月は、

金沢市立三馬小学校、羽咋市立粟ノ保小学校、加賀市立庄小学校、能美市立辰口中央小学校の四校で実施しました。今回は、講座の内容について詳しくご紹介します。今年度の出前講座では日本画、油



彩画、彫塑、浮世絵版画合わせて十四点ほどを学校の体育館やブレイルームなどに運び込み、一クラス一時間ずつ私たち学芸員が鑑賞の授業を行っています。美術館の紹介にはじまり、作品を鑑賞することを身近に感じてもらうためのアートゲームでウォーミングアップ。例えば、作品をみてそこから感じる音やセリフを考えてもらい、その音やセリフを問題にしてどの作品から感じた音やセリフなのか皆で当てるゲーム。その音やセリフがどの作品のものか意見が分かれることは多いのですが、そこにこのゲームの体験してほしいことのひとつがあります。感じる心がみんな違うということ、作品をみることに感じることは正解も間違いもないということ。その後、二点ほどの作品で私たち学芸員がナビゲーターとなり、クラスのみんなで一つの作品を意見を出し合いながらみる対話型鑑賞を行います。この対話型鑑賞で自分が考えもしなかった意見を聞いたり、そこからまた話し合ったりする中で、作品の見方が広がったり深まったりする体験ができるのです。最後は、自分のお気に入りの作品をじっくり鑑賞する自由鑑賞です。このような流れで行われている学校出前講座。十一月に行われる三校で今年度行われる出前講座は、終了予定です。

地域文化が育んだ 美術館・博物館の名品展



当館を含め、愛知県以西十四館の三十三件の伝統的工芸品産業に指定されている工芸品、工芸作品を紹介しました。十五件と最も多い陶芸部門のうち、瀬戸、常滑、信楽、越前、丹波、備前等の中世時代からの六古窯については、桃山時代に茶陶を製作することにより再生し、昭和に入り桃山茶陶の再現に取り組みむところから重要無形文化財保持者が生まれてきた過程が理解いただけたと思います。江戸時代になり、伊万里・有田焼で磁器が焼かれ、瀬戸焼でも磁器が焼かれるようになり、唐津（有田・伊万里）と瀬戸の二大産地が形成されたことも理解いただけたことと思います。また、他の産地と趣を異にする京焼・清水焼の特徴も理解いただけたことと思います。さらに、明治時代になり各産地が殖産興業のため輸出製品の製作を行いました。茶陶を焼いてきた美濃焼においても行われたことを五代西浦円治の作品により紹介しましたが、一点の展示だけでしたので意が通じなかったかもしれません。輸出製品の製作という点では、江戸時代から常に輸出をするための商品開発を続け、ヨーロッパにおいてコピーが作られた伊万里・有田焼のすごさというものが再認識させられました。

紀州漆器、香川漆器、萩焼につきましてはそれぞれの作品世界を鑑賞いただけたことと思います。また、高岡銅器の歴史、現在の日本金工界における位置づけについても理解いただけたことと思います。当館にとっては沖繩県から初めての出品でしたが、染織を中心とする沖繩の工芸を楽しんでいただけたことと思います。

展示スペース、東日本大震災等の

事情により、関東・東北の館を紹介できませんでしたが、また、各品目十点左右しか紹介できませんでしたが、全国には二百を超える伝統的工芸品（国指定）があり、各地の美術館・博物館ではそれらを紹介しています。本展が、皆様が全国の館を訪れるきっかけになれば幸いです。

ギャラリートーク

古澤洋子・五味祥子・山下晴子展

第四展示室で開催し、好評を博した「明日への視座 古澤洋子・五味祥子・山下晴子展」。その関連行事として、十月三十日（日）に三人の出品作家によるギャラリートークを開催しました。三人とも県内はもとより、全国区で活躍する作家です。それぞれに熱心なファンが多く、会場は五十名を超える聴衆の熱気に包まれました。普段は触れることの少ない素顔の作家たち。その言葉の向こうに、制作と真摯に向き合う姿が見られた一時間三十分はあつという間に過ぎたのでした。



十二月の行事予定

17日	祇園会図	高嶋清栄 学芸第二課長
10日	沼田一雅 一人と作品	北澤 寛 学芸専門員
■土曜講座 午後1時30分 美術館講義室 聴講無料 美術館講義室		

企画展Topics

古美術優品展 一山川コレクションを中心とした茶の湯の美一

平成24年1月4日(水)～2月5日(日)会期中無休



県文 鉛釉烏香炉 初代大樋長左衛門



重文 色絵梅花図平水指 野々村仁清



重文 蒔絵和歌の浦図見台
伝清水九兵衛



黄天目 前田家伝来



重文 西湖図 秋月等観



県文 和蘭陀白雁香合 デルフト窯



県文 榎樹図屏風 依屋宗達



市文 書状 高山右近

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 350円 (280円)
大学生 280円 (220円)
高校生以下 無料
※ () 内は団体料金

毎月第1月曜日はコレクション
展示室無料の日

12月の開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後7:00

12月の休館日は
24日(土)～31日(土)

 やさしさ品質

お土産・和洋菓子・生鮮・惣菜・レストラン

地階 **エムザ** 食品館

広告

“もっとお客様へ、もっと地域に”

MEITETSU
MIZA

めいてつ・エムザ

金沢・むさしがは TEL:代表(076)260-1111
http://www.meitetsumza.com/

石川県立美術館だより
第338号(毎月発行)
2011年12月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>